

法住寺殿

— 建春門院の最勝光院 —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



建物の地業（北西から） 周りの整地土を取り外した状態

はじめに 2012年1月から、東山区本町通り10丁目下池田町（一橋小学校跡地）で新校舎建設に先立って発掘調査を実施しました。この場所は、法住寺殿の遺跡内に位置しています。

平安時代後期、後白河上皇は二条・六条・高倉・安德・後鳥羽天皇の五代にわたって院政を行ないました。法住寺殿は、後白河上皇が院の政務を執るために平安京外洛東の地に造営した御所です。平家の強大な武力と経済力を後盾にした上皇の権威により、永暦2年(1161)に、園池（法住寺池）に面して南殿（東山御所）、その北側に北殿（七条御所）などの御所が造られました。長寛元年(1163)には、平清盛の寄進により南殿の北西側

に蓮華王院（三十三間堂）が造営され、承安3年(1173)には、南殿の南西側に後白河法皇の妃である建春門院（平滋子：平清盛の妻・時子の妹）の御願により最勝光院が造営されました。

最勝光院 承安元年(1171)、建春門院は法住寺殿内の法住寺池の西側に阿弥陀堂の造営を思い立ち、法皇とともに宇治の平等院を訪れています。鳳凰堂を下見したのでしょう。翌年には着工され、承安3年(1173)、新御堂・小御堂（持仏堂）が完成し、鐘楼の棟上げがされます。承安5年(1175)、建春門院は院内に新造された南御所に移っています。ところが翌年、建春門院は最勝光院において35歳で死去し、蓮華王院の東側に葬られ

ました。その後、治承2年(1178)には塔心柱が立てられました。

治承5年(1181)には、法皇が新熊野社から最勝光院へ舟で渡り、法皇によりしばらく使用されています。藤原定家は建物の美しさを「土木の華麗、莊嚴の華美、天下第一之仏閣也」と『明月記』に記しています。

最勝光院の寺域は、東西半町・南北二町と推定されますが、建物配置はよくわかっていません。今回の調査はこの様子を知るために行ないました。今回の調査地は、寺域の南部にあたります。

見つけた遺構

整地土 調査地は、東側の東山山麓から西側の鴨川に向かう傾斜地に位置しています。この傾斜し



建物の地業（南西から）



掘込み地業（南東から）



法住寺殿とその周辺

た地形上に、最勝光院の寺域を確保するために、整地を行なって広い平坦面を造成しています。整地土は、黄色の粘質土を主体とし、砂の層を間にはさみ、交互に突き固めながら盛り上げています。この層は厚いところでは約2mもあります。調査区内の約2300平方メートルだけでも、10トンダンブカーに換算すると約780台分の土を運び込んで整地したことになります。これは広い寺域のほんの一部に過ぎません。

地業 数箇所^{じぎょう}で石が集中している部分があり、この部分が建物の基礎「地業」と考えられます。建物が建つ範囲に拳大の河原石を敷き詰め、その上を粘質土で一面に覆い、上から強く叩き締めて河原石と粘質土の隙間を無くします。さらに、この上に河原石を敷き詰める…この作業を交互に繰り返します。最も厚い部分では6層を確認していますが、上面はすでに削られているので当初の高さは不明です。建物の地業は北端と西端を確認しており、東西4.5m以上、

南北24.5m以上の大規模なものです。この地業は建物の周りの整地土と同時に積み上げられています。一方、整地した後に建物の範囲内を掘り込んで、石と粘質土を交互に積み上げて叩き締める「掘込み地業」と呼ばれる地業も発見しています。このように違った工法の地業があることから、建物群は一斉に造営されていないことがわかります。これらの地業や整地の工法は、白河殿の延勝寺、鳥羽離宮の金剛心院釈迦堂、法金剛院の東御門など、院政期の御所の基礎工事と同様です（リーフレット京都NO.31参照）。

外周施設 最勝光院西辺の築地跡や街路、さらに南端を示すと見られる溝状遺構を発見したことは大きな成果です。

以前の調査では、井戸から^{ようらく}瓔珞とみられる金具やガラス玉が出土しており、その多くが被熱し、火災の事実を物語っています。

おわりに 最勝光院には、法住寺池の西岸に面して東向きの阿弥陀堂が造られ、その姿は宇治平等

院鳳凰堂を模した優美な建物で、法皇と建春門院は前面の池から舟で南殿や新熊野社に渡っています。今回発見した建物地業はその位置と規模から阿弥陀堂に付属した建物の可能性が高いと見られます。今回の調査で発見した整地層や地業により、最勝光院の造営がいか

に大事業であったかがうかがい知れます。

治承5年(1181)、清盛が亡くなった時には、最勝光院から今様乱舞の声があがったとも言われます。寿永2年(1183)、平家都落ちのち、元暦2年(1185)、都を襲った大地震により最勝光院でも北釣殿・二階廊・進物所屋などの建物が倒壊しました。都の人々は、滅亡した平家がもたらした禍^{わざわい}と噂しました。その後、嘉禄2年(1226)に放火により堂舎が焼亡しましたが、翌年に再建されています。ひととき栄華を誇った最勝光院ですが、正安3年(1301)、高辻富小路近辺に発した火事で類焼し、以後再建の記事は見あたりません。

(小檜山一良)